

会議名	平成 19 年度（第 62 回）関東畜産学会大会
開催日時	平成 19 年 11 月 6 日(火) 10:00～17:00
開催場所	栃木県自治研修所(宇都宮市埴田1-1-20)
主催者	関東畜産学会 第 62 回大会委員長 吉沢 崇(栃木県畜産振興課長)
参加人数(概数)	約 100 名(学生会員を含む)
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>今大会には一般講演として口頭 14、ポスター発表で 14、計 28 課題が報告された。この中から、畜産技術開発課題に関連する情報について報告する。</p> <p>一般講演 10:00～11:45</p> <p>生理、栄養、飼料、育種遺伝分野の 4 課題が報告された。</p> <p>1-1「成長ホルモン遺伝子型の異なる黒毛和種去勢肥育牛における脂肪厚の変化と血中レプチン濃度の関係について」(栃木畜試): 背脂肪厚の変化と血漿中レプチン濃度の変化に関連性が見られ、遺伝子型による背脂肪厚の変化パターンの違いがレプチン分泌のパターンに影響を与える可能性が示唆された。供試牛の低増体と性差についての指摘があった。</p> <p>1-3「乾燥ゆば粕パウダーの乳牛における飼料価値に関する検討」(農工大、宇大): パウダーについて品質の安定性に問題がなく、給与試験で乳量が上昇傾向、乳質が向上したが、泌乳試験の方法に問題があり、資源量と製造コストについて指摘があった。</p> <p>1-4「人工第一胃内の繊維およびデンプンの分解能に及ぼすカビ毒(DON)の影響」(日獣医大): 飼料に発生する DON は、ウシに慢性的な下痢や発育障害、乳量低下を引き起こす。インビトロ実験により、DON はデンプンと繊維の分解を抑制し、ルーメン微生物により分解されることを推察した。</p> <p>1-5「各種動物の体毛からの DNA 抽出と分析」(宇大): 野生動物を捕獲しないで DNA 解析データが得られる利点は大きく、その基礎技術としてシカ、クマ、カラスとウシ、マウス、ニワトリの毛や羽毛を用いる DNA 抽出条件を検討した。</p> <p>平成 19 年度通常総会および日本畜産学会関東支部総会 13:00～13:45</p> <p>報告事項(平成 18 年度事業報告・会計報告・および会計監査報告、平成 19 年度事業提案事項(平成 19 年度事業計画案・予算案)について原案通り承認。平成 18・19 年度関東畜産学会は議案なし。次期開催県(群馬)を承認、大会委員長挨拶。</p> <p>一般講演 14:00～16:00</p> <p>豚の繁殖 4 課題と畜産物利用 3 課題が報告された。</p> <p>1-8「生産性の異なる農場における雌豚の初交配日齢と長期生存性との関連性」(明大)、1-9「雌豚の繁殖障害による淘汰傾向と関連要因および非生産日数」(明大)、1-10「繁殖雌豚の四肢障害による淘汰の発生パターンと淘汰間隔」(明大)、1-11「農場における雌豚の淘汰産暦での種付け回数および淘汰までの日数」(明大): これら 4 課題は、生産記録ソフト(PigCHAMP: 米国)を使用している全国の農場 122 にデータの提供を依頼し、提供された中から母豚 13,781 頭、子豚 60,846 等の生涯記録を分析に供したものである。</p>

1 - 12「Solvent assisted flavor evaporation 抽出による山羊肉香気成分の測定」(日獣大):NZ産ボア種去勢雄精肉を用い、生、湯煎2分、両面焼き2分について香気成分分析と匂い嗅ぎ分析を行った。

1 - 13「山羊乳の受容性に関する研究 消費者へのアンケート結果から」(日獣大)

大学新入生の保証人272人(女性62%、49.5±6.1歳、主として東京および近県)のアンケート回答から、飲用経験者76%(主として10代以前に)、試飲してみたい約7割、購入の意志あり24%、山羊乳市販認知1割程度、健康食品としての効能について9割の回答者は知らないと回答。山羊乳の宣伝活動と健康食品の市場展開が必要。

1 - 14「大手ペットショップチェーンを事例とした小型犬の価格形成に及ぼす要因分析」(日獣大):東京都内2区、1市の3社を対象にデータ収集(インターネット)と経営者への聞き取り調査。体色の価格への影響が強く各犬種本来の色より新色(珍色)の値が高く、雄より雌、日齢の若い方が高く、同条件なら江東区店が足立区店より高く、小平市はさらに安かった。仕入れ価格と販売価格は連動せず、店主の恣意的な価格設定が行われているようだ。

特別講演「栃木県の畜産事情」16:15~17:00 (栃木県畜産振興課長 吉沢崇)

農業産出額の33%が畜産(酪農317億円、豚197億円、ニワトリ51億円)。戸数は酪農1100、肉牛1500、豚188、鶏94戸。耕地面積の8割が水田で草地は2%の2600ha、米と園芸のイチゴ、トマトが強い。災害の少ない地域事情が逆に農業の活力を弱めている風潮もある。牛乳生産量は北海道に次ぐ全国2位だが46%は生乳で首都圏に出荷、スーパーカウ整備事業を行っている。肉用牛は繁殖雌1万3千頭で、乳牛の借り腹を含め年間子牛販売約8,300頭。牛肉ブランドは「とちぎ和牛」。

ポスター発表による一般講演(展示10:00~16:00、討論12:30~13:00)

畜産物利用4課題、繁殖3課題、行動4課題、害虫防除2課題、畜産工学1課題の計14課題が報告された。

2 - 1「ソーセージ用天然ケーシングの機械特性および生化学的特性に及ぼすアルカリ処理の効果」(麻布大):消費者に好まれる適度な弾力性と特有な食感を持たせ、品質の均一性を保つために経験的に行われているアルカリ処理を理論的に解析するために試験を行い、ケーシングの変化を評価した。アルカリ処理ケーシングでは、コラーゲンの加熱溶解性の上昇、つまり熱安定性の低下により、最大荷重値と破断歪率が減少したためにケーシングが軟化したと考えられる。

2 - 2「ラクトコッカス属乳酸菌 H61 株の抗酸化作用について」(畜草研):インビトロ、インビボで解析し、H61株は抗酸化作用を有しており、かつ生体においても抗酸化作用を発揮できることが明らかになり、抗酸化能が H61 株の抗老化作用に關与する可能性が示唆された。

2 - 3「“甲州地どり”の食味特性および認知に関する調査」(日獣大):官能検査によ

	<p>り歯ごたえがあり、硬く、色が濃いのが好まれた。山梨県下在住の大学生 93 名(うち女子 94%)に対するアンケート調査により「甲州地どり」の認知度は 61%、食べた経験者は 14%。</p> <p>2 - 4「牛生体における超音波診断技術によるシコリ予測の可能性」(日獣大):ホル種去勢牛 22 頭について、出荷前の超音波診断による画像の特徴と枝肉における僧帽筋のシコリ発生の程度とを比較検討していくつかの知見を得た。</p> <p>2 - 8「水禽(アイガモ)の群れ行動の分析と群れ行動シミュレーターの開発」(中央農セ):アイガモと稲の複合農業で生ずる問題対応のため、アイガモの行動を十分に把握する必要があり、その手法の開発と動物の群れの形成に関する汎用モデルの開発を目的としている。</p> <p>2 - 13「ハーブ香料によるハエ忌避効果の検討」(東農大):ペパーミンを用いた試験の結果、ハーブの噴霧効果が 5~10 分間持続することから、搾乳前の噴霧により搾乳作業中のハエ飛来を妨げる効果あり。</p> <p>2 - 14「クーリング・パッドを備えたトンネル型無窓鶏舎の夏季における舎内環境の特徴」(日獣大):'07 年 8 月の酷暑により関東地方の鶏舎で熱死が発生した養鶏場が少なかったが、クーリング・パッド(外気を水冷、大型ファンを自動運転)を備えた無窓鶏舎では被害がなかった。大規模養鶏場の実規模鶏舎で外気 36.5 の日に測定した舎内気温は 30 程度で、暑熱地域における夏季の暑熱防止にパッドを備えたトンネル型無窓鶏舎の導入が有効。</p>
<p>2 . 今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題</p>	<p>2 - 8「水禽(アイガモ)の群れ行動の分析と群れ行動シミュレーターの開発」のような課題は、有機農業、有機畜産のための個別基礎技術として重要と考えられるが我が国では研究例が少ない。これまで公的研究ではやや異端視されてきた有機農産物・畜産物も消費者からの支持により昨今は、認知度が高まってきている。有機畜産物生産の技術は関連する分野が広く、研究期間も長期間を必要とする。この問題に取り組む研究者、研究機関、プロジェクト研究などがさらに増えることが期待される。</p>
<p>3 . その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>1-12、13、14 や 2-2、3 などのように消費者の方に目を向けた課題が多くなってきた。この傾向は消費者の多い関東畜産学会にとって好ましい方向と言えよう。</p>
<p>4 . 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	

<p>5 . 会議の所感</p>	<p>・報告課題数 28 は前回よりやや増加傾向、筆頭報告者の所属は大学 23(私立 16、独法 7)、公立機関 3、独法 2 と私立大学からが多かった。関東畜産学会大会発表のこの傾向は例年と変わらず、院生、若手研究者が多かった。畜産学の教育を受けた卒業学生の行政、研究への参入が多くはない。この分野への異分野からの参入も必要であろうが専門技術の再教育・学習も必要となり、また、畜産経営の後継者不足が言われ非農家出身者の新規参入が求められている中で、これらの畜産学の教育を受けた若手人材を畜産の現場に誘導する策が必要と思われる。</p> <p>・関東畜産学会報への投稿論文数についても、今年 10 月発行の 58 巻 1 号を例にとれば 8 報中の 6 報が私立大学からのものである。一方、関東地区には国立系の独法研究機関、各県には試験研究機関もまだ多く存在している状況で、これらの機関からの関東畜産学会への報告が少ない傾向の見られることは、やはりやや異常といえるのではなかろうか。地域畜産振興のためには、これら機関に所属する研究者の評価システムにも問題があるように思われる。</p> <p>・</p>
<p>報告者</p>	<p>針生 程吉</p>